



## 陶 士 の 道

福 士 幸 次 郎

\*\*\*

人間の社會的本能が永いあひだ掛つて作りあげた文明的産物のなかで、吾々が生れるに共にあつたので、どこへ行つても當然あるものかの様に思ひこみ、その有り難味を格別感じないものに道路といふものがある。

考へて見るに人間の生活は、家の中にあつて疊のうへに坐り、椅子に腰かける外は、道路のうへでの一生である。家の前へ、町の中のもの延長した關係に於て、どこまでも道路の上、果てしなく道路の上である。富士の頂きにもこの道路を傳つてあがり、其れを傳つて下り、そしてまたこ

の道路は平地を越え、川をわたり、村々を縫ひして、東京銀座のアスファルト道路にも繋がる。この點吾々普通の公衆で道路からはづれることは、警句的に言へば人間の社會から離れるのである。それを見失ふことは、社會を見失ふのである。そこには吾々の心を見えぬ糸で繋ぐ社會といふものが消え失せ、周圍の自然が俄かに大きな力でおし寄せて吾々を不安の底に突きおこす。東京の近郊に出で、美しい日光のもきに木々や畑や遠山を眺め、

『自然はいゝなア』

を讚賞するのも、實は道路のうへでするのであり、乃至は道路が傍で保證し掩護してゐる草原や、林の下でしてゐる

のである。

わたしはその昔小笠原島の山の中で或る夕方路を見失つて、この糸を斷ち切られて、今更社會いふもの、大きな方に驚いた事がある。季節は冬で、或る夕方散步に裏の小高い山にあがり、これぐらゐの山さばかり、おなじ續きの山の背に出やうとして道を無くしたのが基で、その後四五時間眞つ暗な中を手探りで、岩を傳つて迷つて歩いた事がある……

\*\*\*

暗の中を見透かすに、一に飛びすれば直ぐまた下に足場になる岩が二三尺下ぐらゐに見えるので、飛び下りやうかと思ふのだが、用心に若くはなしに傍を傳つてそろ／＼降りて見る。降り切つて見るに、膽を冷やした。こゝには一に飛びで降りられるところか、一丈あまりの高さの岩で、足溜りになる所どころか、其處から直ぐまた崖になつてゐるのだ。その後闇中のこんな幻覺に二度ばかり引つ掛つて、ぞ

つゝ寒氣がし、これは駄目だ。下山するのは斷念めて今度は方向を更へ、山の中腹を思はれるあたりを横に傳つて歩いた。そして灌木の生ひしげつた平地に来て腰をおろし、足を投げ出して、そこで野宿するつもりになつた。その内月が出たが其處らが青く薄ぼんやり見えて來た。

恰度ピロウの木の根株の腐つたのが落ちてあつたので、これを枕に枯草の上にゴロリと寝込んだ。時候はこの頃は小笠原島だ。暑からず寒からず、空氣も地上も濕つほくもなし、悪い蟲はるす、野宿には何の苦もなかつた。

だが三十分あまりも斯んな事をして屋などを仰いでゐたが、さつちへ歩いたつて一里あるかなしの島の中で、今さら野宿などするのが可笑しくもあり、馬鹿らしくもあり、また起きあがつて灌木の茂みの中に飛び込み、山の横を横をと傳つてまた進んで行つた。これが暫く續いた。そしてさうさう山あひの小さい流れのある空地が、薄ぼんやりと月に照らされてゐるところへ來た。

『この空地は慥かに人間が切り開いた林のあきだ。それに

流れがある。これを傳つてゆくさいい。』と考へた。

果して四五十歩もゆくと、流れの岸がさゝやかながらも石垣になり、そこに細い路が現れた。わたしはまるで夢見るやうな氣持でこの路を、それから石垣を、流れを、またその上に生ひかぶさつて茂つてゐる往く手の密林を眺めた。そして山の中で四五時間も彷徨した獨りほつちな心に、目に見えぬ無数の人間が一つに固まつて、強く一時に結びつけられるのを感じた。

野獸は人間の道路を見つけるに多分香ひをまつ嗅ぎ、次で前方を恐怖の氣持で見やり、そして直ぐ傍らの叢に身を躍らせて逃れ去る。彼れにはこの道路なるものは唯だ神秘的な恐怖である。然るに人間にまつてこの神秘は、いふまでもなく人間の限界の表明である。

わたしの心は足がこの路を踏み出すと共に、汲みあげポンプが水を吸ひあげるやうに此の神秘を吸ひあげ、林から峽ミ降りて行つて、ミウ／＼バナ、の葉蔭に家のある處に ついた。

今でもあの時のことを思ふと、よくあの崖から落ちなかつたと思ひ、そしてあの最初路を見つけ出した時の一時に氣強くなつた心持を思ひ出す。

わたしの郷里津輕地方（弘前地方）は、日本本土の日本海に向つた東北端で、人口は濃密ではないが、面積は千葉縣一縣ぐらゐの廣さがある。まだわたしの廿五六歳の折り、柳田國男先生をお訪ねした時、この地方のここを私等よりも熟知してゐられる先生は、日本の文明は主に南と北の二つの方向から入つて來てゐるこいふ私見を語られ、その北の方は十三瀉から岩木川を傳つて南下したもののぢやないかと思つてゐる言はれた。

自分の故郷の沼や河川について、斯ういふ暗示を受けることは嬉しいものである。このお話を聞いてから十三年目になる昨年（昭和二年）の九月、わたしはこの十三瀉への海岸や、洲や、こゝに注ぐ岩木川の河口などを、ゆる

ゆる四日ばかり踏査して見た。日本本土の端で、之れから先きは日本海の黒い海ばかりだといふ、この邊の無人境のやうに寂漠な、茫々とした風景は逆も氣に入つた。

關東の人に解りよいやうに説明するに、この邊の地形は霞が浦の邊を小さくしたやうな所である。そして岩木川は大刀根で、更に後者が鬼怒川と言ひ、吾妻碓氷と言ふ上流まで込めて、沿岸に廣々作りなした大平野は、津輕平野の地勢に、いかにも似通つてゐるふしがある。たゞそれ程大きくないといふだけである。そして大きくないだけ私などには、平野にしても、川にしても、瀉にしても、また海岸にしても、風景に纏りがあつて好ましく見える。更に前にも言つたが、無人境めいて、人間臭さのない所が一層いい。たゞし之れ等は皆御國者としての私が、自分勝手好みのまゝにいふのである。

瀉が海に接してゐる水口が狭くつて、やつと小型の帆まへ船が通れるくらゐの、砂丘の切れ目を遠くに眺め、また其處に打あげる波の沫を遠くに眺め、渡し船でわたしは瀉

の向ふ岸へわたつた。渡し船はやつと十人ばかり乗れる小さいものだが、巧みに帆を張つて、水口を中心の孤線狀の岸を横目に見ながら、一直線に對岸目がけて走つて、わたしや乗合ひの田舎の女小供四五人を渡して、くれたのであつた。

岸には棧橋なんて氣のきいたものがなく、唯だそこらあたりシヨボク葦が生えてゐた。舟がつくま私は岸の砂地に飛び下り、やがて小草が敷きつめて遙か向ふの丘まで續き平地のへりに茫然と立つた。そこには路がなかつた。へりを傳つて四五十歩行つて見ても同様であつた。私は戸惑ひしたやうに、へりを彼方へ行き此方へ行つた。そのうちわたしの腹に無限のをかしさが込みあげて來た。

渡し船で人を渡してゐるくらゐの處に路がないなんて、何んたることだといふ風に考へるに、この日本本土の端の準無人境の素朴さが、むしろ可愛くなつたのであつた。

岸では今まで私と乗合はしてゐた百姓の女達が、一つ處

にかたまつて、背に負つてゐる小供を背負ひなほしたり、持ち物を始末したり、着物の裾を帯に挟んだりして、遠出の支度をしてゐた。彼女等は泊りがけて之れから他の村へ訪ねてゆくのか、もう訪ねて来て之れから吾が村へ歸へるのか、お粗末なものながら皆晴れ着を着てゐた。頗かぶりをした老婆が二人、筒袖の娘が一人、その他は小供であつた。そして先程から私のマゴついてゐる事に目をとめてゐたのか、この内の一人の婆さんが聲を掛けた。

『旦那様、路ア此方コチでさね。俺達も今行くんだハデ、一緒いっしょネ來へナ。』旦那さん、路は此方にある。私達も今行くんだから一緒に來ないかの意。と氣輕に言つてくれた。

『ア、そダナ。一緒いっしょネ加デカ、呉ろヂヤ』（あ、さうか、そ入りさせて）とわたしも地方語で、この婆さんの厚意に應へた。

やがて一行は路のない草地を踏んで、向ふの丘の林を目がけて進んだ。ろくな立木もいふものもなく、田や畑もなく唯だ目につくものこいふこいふ前方にうね〜と起き伏す丘

と、草地の右に廣々こひろがる船の影一つ見えぬ瀉しであつた。わたしは日本の中にあつて日本から取り残され、路もないこの寂しい土地を歩くのに限りもない興味を感じながら、一行いっしょ後になり先きになり歩いたのであつた。

\*\*\*

この無人の境に近い地方は、それでも昔は榮えた地方であつた。今でも瀉沿ひの或る村からは、日本の古い時代を徴しるしたてる瓦が出る奈良朝の初期から、さらにもつと溯つては、古日本人が尊重した朝鮮の瓦が出る。中世のものでは佛像が出る。これを百姓が畠の中から掘り出したりするこ、勿體ないと言つて背中に入れて家へ持つてかへるのである。さらに先住民族の土器や石器しなるこ、日本で隨一のその種類の豊富な處である。文明が榮えたのに違ひない。だが今は瀉沿ひや山際に貧しい村がまばらにあるだけで、場所によつてはこの通り僅かながらも路の途切れてゐる箇所さへあるのである。

前歴史時代から今を溯る六七百年前の中世まで續いた土地の永い榮えも、それを引きつぎ若くは傳説のもこに語りつぐ人間も、自然はみな呑みこんでしまつた、そして地上には唯だ虚しい景色ばかりを残したのであつた。

\*\*\*

二十三歳のときわたしは酷い厭世思想に摺まつて、死ぬにも死ねない結果が、東京を飛び出して中部地方を勞働しいしい、漂泊して歩いた事があつた。信州の飯田から名古屋まで三十何里の街道を歩いたのは、その時飯田の町が遠く大平街道から眺めるこ、ぐるりを海のやうに廣々こ青い桑畑で圍まれ、節句の鯉幟を空中に澤山なびかせてゐたのを見れば、六月頃であつたと思ふ。この邊は年中行事を一月おくれでやるのが風習であつた。

わたしはこの時漂泊生活にはおきまり通り一錢の金も有たなかつた。一張羅の下テラを尻はしよりし、顔は帽子がないので頬かむりした。大平峠を越えて夕方ドシヤ降りの

雨にあひ、雨やごりをしたのが縁で其處の石きり小舎の阿翁<sup>おきな</sup>あんに夕飯を振舞はれ泊めて貰ひ、そのうへ翌日の一日の糧<sup>かじ</sup>として大きな握り飯を三つ四つ貰つた。太平街道から中仙道の廣い往還に出、わたしはこの後名古屋まで二十何里の道を、二日掛つて歩いたか、三日掛つたか判断がつかぬが、眠くなればごこへでも寢、歩くときは夜も晝もなく歩き、貰つた握り飯を喰つてしまつて腹が減つては、水をガブ／＼呑み、時には地の窪みに貯つてゐる雨水なども手で掬つて呑み、何の樹か知らぬが地に一面にこぼしてゐる赤い小さな實を拾つて喰つた。草鞋は道端に落ちたのを穿き、菘は卷菘の吸ひからしを拾つて、吸ひ口際に残つてゐる奴を煙管につめて喫んだ。なあに漂泊生活だ、こんな事を平氣でやるやうでなくつちやと思つて、これ等のこは構はずやつたのであつた。

手探りして行かなければ流石に廣い中仙道の往還も、こゝう歩いていゝか解らぬこいふやうな深夜中に、こある山中にさし掛つて、いきなりピューこいふ四邊の沈黙を裂く物

音に、吃驚して飛びあがつたこきもあつたが、這ふやうにして道の際の土盛りした處へそろ／＼行つて、物音のした方を透かして見たら、下は崖になつてゐるらしく、そして圓く青い火と赤い火の見えてシウ／＼言つてゐるのは、まさしく今トネルの前にさし掛つてゐる汽車の機關車であつた。

だが依然人にも行き當らず人家も見えず、この山中から平地に往還が移り、暗くつて見えるわけもない行く手の路面が、時を置いてほのかに見えるたり、また暗の中にくるまつて仕舞ふのに氣がついた時は、機關車の汽笛でおきかされたのこは別な氣持で、何かしらん異様な無氣味なものだと思つて、ぢつと暗に立ちまゝつて前方を見透かした。

こきには路面ばかりでなく、電信柱の影のやうなものが見えた。

わたしは今迄まほりヒタ向きに前へ／＼と歩きながら、暗の中のこの明暗の變化に思ひを凝らしながら進んだ。その内何時聞いた話だか行者などがよく夜一人で旅びするこ

路でこんな目に逢つて、これは狐や貉のする業だから、行者はその時暗中に立ちまゝつてお定まりの呪文を唱へるこいふ事を思ひ出した。わたしは呪文などの信仰はなく、それに迷信はその頃から嫌ひであつた。なほ引き續いて明暗の變化を見まもりながら、ヒタ向きに歩いてゆくうちに、ふとこの變化は自分の呼吸の作用に伴ふものであるのに氣がついた。つまり息を吸ひいれるこき何か前方が見えて來、息を出すこき前方が暗の中に隠れてしまふやうに感じた。わたしはソラ見えた、ソラ消えたこき嘸すやうにしながら、闇の中に大きく擴がつてゐる平野を感じながら歩いた。多分この邊が尾張平野の入口で、もあつたらうか。

\*\*\*

前にも言つたが此の名古屋まで行く中仙道一文なしの旅、したがつて何も喰はずの旅（握り飯は中津位まではあつたらう）は、二日掛つたものか、三日掛つたものか私には今もつて判断が立たぬ。足がひよろけたのは名古屋の市

中に入つてからで、わたしはそれまでは時には急な、大部分は目につかぬくらゐに緩かな、尾張平野に大きく下つてゆく歴史的に有名な街道を、今から思ふこまるで驅けおりでもしたやうな氣持で思ひ出すのである。そして眠くなるミ行き當りバツタリに眠つたのは日中が多かつたが、夜道の方がより多く印象濃く今も残る。

だがその街道がヒタ／＼ミ歩き心持の滑かな、しめつた土であることは、われ／＼東北人が茶碗や皿やで馴染みの深い陶土であるからであらうか、この印象ミしては私は此の旅中の二つの夜明けの景色を思ひ出す。一つは何處で

あつたか知れぬが、ミある山中に田が段々に作られてあつて、その黄色い泥を身體中ぐつしよりミ氣持わるく露にぬれながら、眠い眼で見まつたことである。今ひこつはこの旅で名古屋入りのする日の夜明け、往還のミある空屋の縁臺に腰を下して、うつら／＼居眠りながら、地獄の餓鬼を思はせるやうな半裸體の貧弱な労働者が、梶棒に犬をつけ、車臺には瀬戸物を満載して、のべつ目まぐるしく曳いて行くのを見たことである。わたしはこゝまで来て一度に疲れて、凡そ何時間眠つたか解らない。しかし夢だと言へぬくらゐ鮮かに、この街道の景色を覚えてゐる。